

## 「コスタリカの積極的平和」

2014年07月13日

『週刊金曜日』に連載の朝日新聞記者による「伊藤千尋の国際時転」にコスタリカについて、興味深い報告が掲載されていた。

コスタリカは平和憲法を作り、軍隊をなくした。平和外交を展開し、平和国家と認知され「攻められない国」になった。自衛権を放棄している訳ではなく、国境警備隊を用意し、いざとなれば、大統領が義勇兵を募り、抗戦できる仕組みはできている。アメリカ大陸の集団安全保障の相互援助条約にも加入している。ただし、加盟義務である「地域紛争への派兵」は拒否し、医療や食料などで貢献することを認めさせた。軍備を捨てた平和主義を堅持する国を作りあげた。軍備費が不要なので、教育、医療、福祉が行き届いている。

コスタリカはワールドカップに出場し、1次リーグでは強者が集まる「死の組」に入り、3強1弱の「1弱」と言われていたが、1位で突破した。サッカーの専門家は「弱者の戦い方」を貫いて、守りを固めた「専守防衛」が勝因だと言っているそうである。

コスタリカの中学2年の公民の教科書に「平和とは戦争がない状態ではない」と書いている。単に戦争がないことは「消極的平和」と言い、差別や貧困、抑圧などの紛争を起こす火種をなくす「積極的平和」を目指している。一方、安倍首相は軍事力を強化し、集団的自衛権を行使できることによって抑止力が高まる、それを「積極的平和」と言っている。同じ言葉であるが、逆方向を向いている。更に、コスタリカの教科書に「国家を統治している人の多くは嫌な考えを持っています。彼らは権力を失うことを恐れています。政治家から裏切られ不誠実な演説を聞くことがたくさんあります」と書いている。子どもの時から、権力は墮落し、横暴に走る危険性を教えている。安倍政治は、行政が教育に口出しし、国の意に沿う教育を目指している。コスタリカは日本とは真逆で、権力に対する批判を自明のこととしている。

10年前の2004年、コスタリカの往時の大統領が米国のイラク戦争を支持した。ロベルト・サモラ氏という大学生が大統領を憲法違反で訴え、勝訴した。大統領は非を認めて、米国の戦争支持を取り下げた。世界に発信され、注目を集めた出来事であった。ロベルト氏は現在、弁護士として活躍している。伊藤氏はロベルト氏に安倍政権が閣議決定で解釈改憲したことについてコメントを求めたところ、即座に答えてきた。「この決定は不法かつ違憲である。そもそも一つの内閣が勝手に憲法を『読み解き、翻訳する』力は持っていない。安倍内閣の動きは国際関係を逆行させるものだ」。何と健全なコメントではないか。

安倍政権は、集団的自衛権の行使容認の条件として「わが国の存立が脅かされ、国民の生命、自由および幸福追求の権利が根底から覆される明白な危険がある場合」と言っている。「明白な危険」を誰が判定するのか。判定基準が「特定秘密保護法」によって隠される。また、それを探ろうとすると、罰せられる可能性が高い。これでは、権力を規制する立憲主義、法で統治される法治国家は成り立たない。一内閣の思惑によって、好きなように、他国との戦争に巻き込まれていく。日本は今、国のあり方に関し、重大な分岐点を迎えている。安倍政治が続くと、米国の戦争に自衛隊が駆り出され、戦死者が出、相手方も殺すようになる。戦後、平和憲法を守ってきた国民の英知と努力を無駄にしてはならない。

13日(日)14日(月)15日(火)の正午から午後1時40分まで、「『閣議決定』撤回！国会包囲大行動」が行われる。参加しようではありませんか。